

【ベッド — BED —】

紫楼 巧

【1】

『それ』を初めて（？）見たのは、月曜の朝だった。

月曜と朝と言えば、普通のサラリーマンだったら寝不足気味の頭を抱えて、会社に向かうつて時だけど、俺の場合はそうじゃない。フリーのプログラマー、まあ、悪く言や、プーだ、の俺は、何かの拍子にふと目が覚めてしまったんだ。

枕元の時計を見ると、まだ九時前。一旦、眠ってしまうと滅多に昼過ぎまではベッドを出ることならない俺は、口の中でぶつぶつと悪態をついて、もう一度布団を被ろうとしたさ。

で、その時だ、ベッドのヘッドボードに貼りついていた『それ』が目に入ったのは。

色はもちろん、肌色だ。真ん中を通っているスリットに分けられた左右の髪は、ふっくらと盛りあがっていて、生えている毛は薄く、割れ目の上端からぼつりと出っ張っている快感の突起を透かし見せている。

『それ』がなに、いや、女の『ナニ』だと気づくと、最初は、あまり趣味のよくないエログッズだと思った。

最近じゃ、インターネットの通販で簡単に買えるらしいもんな……。

買った覚えもないのに、まだ眠気の残っている頭でそんなことを考えながら、伸ばした手で触ってみる。

途端に、眠気なんてふっ飛んでしまった。

『それ』は女の秘部の柔らかさと温もりを持っていた。おまけに、触って歪んだスリットの奥には、赤に近いピンク色をした小陰唇がわずかに覗いており、それが、急に触れたことに驚いたように、小さく震えたのだ。

【2】

熱い目に調整したシャワーの湯が、頭に勢いよく吹きかかってきた。

手に取ったシャンプーを塗りつけて、勢いよく泡立てる。

ありや、いったい何なんだよ？

決まってるじゃないか、女のアレだよ、オマ○コだって。

んじや、どうしてそんなモンが、俺のベッドに貼りついてんだよ？

そんなこと分かるかよ、やっぱりエログッズのたぐいじゃないのか、誰かの悪戯だとかさ。

だけど、昨日の夜にはあんなモンなかったし、だいたい、そんな悪戯をするような知り合いにも心当たりないぞ。

何度考えても、結局同じところに行き着いてしまう。要は、何も分かっちゃいないってことだ。

シャワーを終えて、完全にハッキリとした頭で、寝室に戻った。

やっぱり『それ』は、依然として、掛け布団と皺になったシーツを乗せたベッドのヘッドボードに貼りついていた。

窓からは、そろそろ洗濯が必用になっているカーテンを通して、まだ朝の雰囲気を残した日光が射しこんでいる。床には、コンピュータ関係の参考書や、小説の文庫本、マンガ雑誌等が散らばっており、ゴミ箱の中では、昨夜寝る前に食ったカップ麺の容器が、数本の干からびた麺をこびりつかせていた。

そんな、いつも通りの部屋の中では、『それ』は、滑稽なぐらいに奇妙なものに見えた。

ベッドの端に腰を下ろして、じつくりと眺めてみる。

『それ』は、貼りついているって言うよりも、ニス塗りの平らな木製の板から盛りあがっているって感じで、木との境目は、はっきりしないぐらいにぼやけていた。

だけど、その点を別にしたら、見れば見るほど、女のアソコそのもので――

似てる……。

これって、曜子のに、そっくりじゃないか。

曜子ってのは、まあ、俺の恋人と言ってもいい女だ。一昨年卒業した大学からのつき合いで、もちろん、やることもヤツてる仲だ。

確かに、このベッドで何度も曜子とシタし、また、そのことを思い出しながらオナニーもやったけど……。

まさか、その時の妄想が、現実の形になって……。

ふと、そんな考えも浮かんだけれど、すぐに馬鹿馬鹿しくなって頭を振った。三文SFじゃあるまいし。

じゃあ、いったい？

顔をヘッドボードに寄せて、指先で触れてみる。

曜子のだったら、まさか、噛みつきやしないよな。

指をスリットに沿わせて、スツと撫で下ろす。会陰を軽く刺激してから、そのまま上に滑らせる。

何度も繰り返しているうちに秘部全体がヒクツと震えて、厚みを増して広がった合わせ目から、透明なしたたりが薄く滲み出してきた。

続けて、狭間に指を浅く差し入れると、熱くトロとした愛液に濡れた小陰唇が触れ、その繊細な表面を指の腹で撫でてやると……。

ほら、そろそろだ。

薄い目の陰毛の奥でクリトリスが頭をもたげて、少しだけめくれた包皮の先から中の艶々とした突起が顔を覗かせた。

でも、曜子の場合、ここでこいつに触ったら、あまりよくないんだよな。先にこっちの方を―― たつぷりと愛液をまぶした指を膣口に当て、周囲の柔らかい肉をかき分けるようにして挿入していく。

ヌルツとした感触と共に、中に詰まっている膣肉が分かれ、かすかなザラつきを持った襞が指を包みこんでくる。更に奥に進めると、憶えのある手触りの向うに、狭まった部分があった。やっぱりだ、中も外も、これ曜子のにそっくりだよ。

そうだ、挿れてみたら、もつと締まり具合とかよく分かるかも……。

でもなあ……。

ベッドに膝をついて、抱えたヘッドボードに向かって腰を使っている自分の姿を想像すると、どうしてもそんな気分にはなれなかった。

*

「こんな時間に珍しいじゃない、どうかしたの？」

リビング兼仕事部屋からかけた電話の向うから、曜子が携帯電話で応えた。

多分、昼食に出ているのだろう、声の背景からは、食事時のざわついた店の雰囲気伝わってくる。

「俺だっただけには昼前に起きるんだぜ。でき、今、ちょっといいか？」

「ええ、今は一人だけだ」

「あのさ、どこか体で変なところないか？」

「えっ？」

曜子が沈黙する。だけどそれは、思い当たる節があると言うよりも、急に訳の解らないことを訊かれて戸惑っているって感じだ。

「……別にないけど。知ってるでしょう、えーと、ほら、スケジュールはまだ先だし」

つまり、生理はまだ先だったってことだ。

「でも、どうしたの、急にそんなことで電話してくるなんて」

「いや、変りないんだったら、別にいいんだけどな」

「あつ、もしかしてこの前のこと心配してるの？ 大丈夫だって、ちゃんとチェックしてるから」
チェックって？ と、聞き返そうとしたが、すぐに市販の薬を使つての妊娠検査のことだと分かった。一応、キャリアウーマンを自認している曜子は、その件に関してはかなり気を遣つているのだ。

「そうか。じゃあさ、今夜逢わないか？」

「でも、今日は水曜じゃないわよ」

「別に水曜と土曜だけしか、逢っちゃいけないってことないだろう」

「うん……。それはそうだけど、あんまり遅くなったらさ……」

少し躊躇っているような口調だけど、つき合いの長い俺には、曜子が期待しはじめてるのが分かる。

「だったらさ、俺の部屋にこいよ。途中で何か食うもん買ってきてくれたらいいんだし」

「仕方ないな、急に言うんだもんな」

「じゃあ決まりだな。そうだな、食い物はテイクアウトのピザでいいや」

「うん、分かった。じゃあさ、8時頃でいい？」

「8時か、ちよつと遅いけど、かまわないよ」

「じゃあ、8時にね」

曜子のやつ、別にいつもと同じ感じだったよな。やっぱり『あれ』は曜子とは関係ないのか？
まあいいや、きたら確かめたらいいんだしな。じゃあ、それまで暇だし、少し仕事でもやつとくかな。

電話を切った後、請け負っているプログラムの帳票作成ルーチンを仕上げてしまおうと、コンピュータに向かう。

開発言語を起動して、エディタを開く。履歴機能によって、昨日の夜、途中で放置したままだったソースコードが表示された。

コメントを見て、どこまで書いたか調べて――

と、プログラムに集中しようとはしてみたけれど、さっぱり気分が乗らない。

そうだよな『あれ』を見て、曜子がどう反応するか分からないもんな。

きつとすぐには、自分と同じもの、だなんて気づかないだろうから、俺と同じようにエログッズと思うだろうな。もしこれがバイブなら、まあ、何とか言い訳はできるけど、女のアレだもんなあ。

やっぱり、最初は隠しとくのが正解か。

でも、どうすんだ？ まさかパンツ穿かせる訳にもいかないしな。第一、ヘッドボードに引ついているもんにどうやって穿かせるんだよ。

じゃあ、ホームセンターにでも行って何か掛けるものでも買ってくるか。多分、寝具には、そんなたぐいのものがあつたはずだよな。

結局、仕事は一行も進まず、俺は、コンピュータのディスプレイのスイッチだけを切つて、椅子から立ちあがつた。

涼しい電子音を響かせて、玄関のチャイムが鳴つた。

時間は午後の七時四五分。こんな時間に訪問販売のセールスがくるはずはないから、曜子だろ
う。

「ほら、持つて」

ドアを開けた途端、曜子がLサイズのピザを押しつけてきた。

服装は会社用のグレーのスーツ。少し皺になつてる肘には、ショルダーバックと半ダース入りのライトビールのパックを引つけている。

「本当に、急に逢おうだなんて言うんだから」

電話で言ったことを繰り返しながら、肩にかかるぐらいに伸ばしている髪をかきあげて、玄関でハイヒールを脱ぐと、俺の横を通つて、さつさとあがりこんでくる。

「ふー、重かつた」

リビング兼仕事部屋の青い絨毯に横座りになつて、前のテーブルにビールのパックを置く。ちらりとコンピュータを見あげてから、まだピザを抱えたまま、玄関に突つ立っている俺に振り向いてきた。

「で、どうなの？ 仕事の方は上手くいってる？」

「まったくいつもの曜子だった。」

「ああ。まあ、なんとかな」

と、俺もいつものように応え、テーブルを挟んで曜子の前に座つた。

「この前みたいに、納品に一ヶ月も遅れたら、だんだん仕事こなくなるんだからね」
会社が終わつてから直したのだから、薄くシャドーを引いた目を向けてくる。

「分かつてるつて。それに一ヶ月じゃなくて三週間だっただろ」

「同じじゃない。もう、ほんとに」

クスツと口元で笑つてから、スーツを脱ぐ。

「さあ、食べましょう。イタリアンソーセージが乗つたのが好きだったでしょ、トッピング、ダブルにしてもらつたから」

プルトップを引いて開けたビールを俺に差し出して、ピザの紙パッケージを開ける。焼けたチーズとバジリコの芳ばしい香りが広がつた。

「で、今日はどうかしたの？」

ピザを食べ終わると、紙ナプキンで口を拭ってから、曜子が問いかけてきた。

「うん、まあ……」

今朝起きたらな、ベッドのヘッドボードにオマ○コが張りついててき、それがお前のにそっくりなんだよ——とは、いきなり言えないよな。

それに、淡いブルーのブラウスを盛りあげている、決して巨乳つて言うほどじゃないけれど、形の整った二つの膨らみや、青い絨毯の上で、グレーのスカートに包まれて形を歪めている、たっぷりとした肉づきのピップを眺めてると、欲望が湧きあがってきた。

曜子にすり寄って腕を引く。

「もう、何なのよ……」

ほとんど抵抗もなしに寄りかかってきた体を片手で抱いて、襟元にまわしたもう片方の手で、すべすべとした頬に触れる。

曜子が体を動かして、背中を胸板に預けかけてきた。

「分かつてるだろう。ほら——」

上を向かせた顔に顔を寄せて、唇を合わす。

「うん……もう……」

かすかな吐息と共に、ルージュの匂いと混じり合ったチーズの香りが、口の中に広がった。

曜子の唇が浅く開いて、差しこんだ舌を受け入れる。

暖かく、とろっと唾液に濡れた舌を絡め取ると、曜子が体を押しつけてきた。

「先にシャワー浴びさせて……」

湿った声で囁く。

「別にいいじゃないか」

「だって、汗かいちゃってるし」

ブラウスのボタンを外して、開いた胸元に顔を寄せる。薄れはじめているラベンダー系のコロンの香りと、肌の匂いが鼻をくすぐった。

「このままの方がいいって、俺、欲情しちゃうもの」

差し入れた手で、ブラジャーに包まれた膨らみを下側から支えるようにして包みこみ、すっぽりと手の平に収まった乳房の柔らかさを楽しむ。

「もう、ばか……」

曜子が残りのボタンを外した。

大きくはだけたブラウスの下の、フロントフォックの留め金を弾いてやると、二つに分かれたカップの中から、真っ白な膨らみが弾け出てくる。

曜子の乳房は、乳輪も小さめで色も淡く、ポツリと立っている乳首は、まるで少女のそれのよ

うに小粒だ。

「いつ見ても可愛い乳首だな」

指の腹で先端をこすってやると、すぐに頭をもたげて固く張りつめた。

「それに、とっても敏感だしな」

「ねえ、ベッドに行かない？ それとき、アレ、あの中に入ってるから」

絨毯の上に放りだしてあるショルダーバックを示す。

「ゴム着けるの、後でもいいだろう」

「駄目よ。だって、もし……」

「分かったよ。その代わりに、ベッドは後でだからな」

ショルダーバックを引き寄せると、腕の中で曜子がスカートの留め金を外した。

「あっ！ んんっ……」

割り広げた太股の奥に指を這わせると、曜子が、俺の下で喉を鳴らして瞳を閉じる。小振りなせいもあるのだろう、横になっても形を崩していない乳房が震えた。

指先で繊細な手触りの陰毛をかき分けて、こんもりとした恥丘を撫でる。

ふっくらとした二枚の柔肉の狭間に指を埋めると、中は既に、零れだしてしまいそうぐらいに潤んでいた。

「もうヌルヌルになってるぞ」

「だって……久しぶりだもん」

「そんなことないだろう、この前は土曜だったんだぜ」

「意地悪……」

曜子が腰をくねらせて、秘部を指にすり寄せてくる。熱く濡れた小陰唇がヌメツとまとわりついてきた。

薄肉を分けて進めた指先で、小さな円を描くようにして、膣口周囲をじっくりと愛撫する。

「ああっ……。ねえ、じらさないですよ……」

喉の奥から切なげな溜め息を漏らしながら、腰に太股を絡ませてくる。

「駄目だよ。もっと触らせてくれよ」

「また、そうやって、虐めるんだから……」

「そうだよ、俺、曜子を虐めるのが好きだからな」

太股を持ちあげて、その間に腰を入れる。固く突き立っている淫茎で、会陰の辺りをまさぐる。

「あうんっ……。意地悪っ……」

「だから、そうだって言ってるだろ。ほら、言ってみなよ、もっと虐めてっ……」

「ば、ばかっ……。ねえ、早くしたら……」

目を固く閉じて、堪らない様子で腰を揺する。

「言うまで駄目だからな」

「もう……。う、うん……。して……」

「何をかな？」

「欲しいの、分かっているクセに……。ねえったらあ……」

曜子が目を開く。薄く涙で潤んでいる瞳で見あげて、肩を掴んでいる手が、背中を引き寄せようとしてくる。

「……いじめて……。私のこといっぱい虐めて……」

会陰に押し当てていた亀頭を上を滑らせて、濃いヌメリにまみれた膣口をまさぐる。

「ああっ！　そこ、そこに、早くっ……！！」

再び目を閉じた曜子の唇に唇を重ね、舌を深く差し入れながら、腰を突き出す。みっちり詰まった膣肉を押し広げていく時の感触が淫茎全体を包みこんできた。

*

「ねえ、見せたいものって何なのよ？」

俺の後から寝室に入ってくると、曜子が問いかけてきた。その髪は、浴びたシャワーの名残でわずかに湿っており、体には白いバスタオルを巻きつけている。

「ああ、ベッドなんだけどな」

曜子が不思議そうな顔をして、窓際に置かれている寝具に目を向けた。

「へえ、可愛いのが掛かっているじゃない。でもさ、ハッキリ言ってあんな花柄って、あんまり趣味はよくないと思うけどな」

「まあ、ホームセンターで九八十円だったからな。そんなことよりさ、これなんだよ」

ベッドボードに掛かったカバーをめくりあげる。

「えっ？」

そこに現れた『あれ』を見た途端、怪訝な顔をして目をこらす。次第に瞳の奥に理解の色が現れ、そして――

「バ、バカッ！　何よあれ、何であんなモノをあんなところに貼りつけてるのよっ！　まったくなに考えてんの！」

「だからさ、違うんだって」

「違うも何もないでしょ！　もう、こんな変なモノいったいどこで買ったのよ、お金もないクセに、どうしてそんな無駄使いばかりするのよ！」

やっぱりか、やっぱりアダルトグッズと間違えてやがる。

「違うんだって、だからさ、本物なんだって」

「本物？ 余計悪いじゃない、ちゃんと私がいるって言うのに、どうして——えっ？ 本物って……」

「だから、オモチャじゃなくて本物なんだって。それにほら、あの形、よく見てみなよ」
「形って……」

曜子が訝しげに見つめる。

「何だったら、鏡いるか？」

「鏡？ どうしてよ？」

「やっぱり分かんないのかなあ、アレさ、お前のにそっくりなんだよ。形だけじゃなくて、中の感じとかさ、濡れ具合とかもさ」

「バ、バカッ！ このヘンタイっ！ いつの間に型取りしたのよ！」
顔を真っ赤に染めた曜子の平手が、俺の頬に炸裂した。

「ごめんなさい……。だってさ、いきなりこんなの見せられたらさ……」

ベッドに腰を下ろしている俺の横で、曜子が言った。

「そりゃ分かるよ、俺だって最初見た時驚いたからな。でも、あんなに思いつきり叩かなくてもいいじゃないかよ」

「だから、ごめんって言うてるでしょ。でさ、いったいこれって何なの？」

「何って、お前の『ナニ』だろう」

「そんなはずないじゃない、私のはちゃんとここに——」
腰のバスタオルを取ろうとして、ハッと手をとめる。

「どうしたんだよ、じっくり見比べてやるから、股広げてみなよ」

「もう、バカ！ でも、どうしてこんなことになってるのよ」

「それは俺が聞きたいって、何せ俺のベッドなんだからな。お前だって、俺のがベッドから生えてたらどう思う？」

「そんなの嫌に決まってるじゃない、そんなベッドで寝たくないわよ」

「あれ、随分な言い方だな。さっきまであんなに悦んでたクセに」

「そ、それとこれとは別でしょ」

「へえ、どう別なんだよ？」

「だって、朝起きてみたら、大きくなってるのが頭にゴツンとかって……。もう、なに言わせるのよ」

「俺はそんなに嫌じゃないけどな」

「えっ？」

「だって、別に害もないみたいだし、他の女のじゃなくて曜子のだろう、無理やり引っ剥がして死んだりしたら、やっぱり後味悪いもんな」

「……………」

ちらりとヘッドボードに目を向けてから、振りかえってくる。その頬は、恥ずかしさではない赤さに、ぼっと染まっていた。

「本当にそう思ってる？」

「嘘なんて言うかよ。だいたい、そのつもりがなかったら見せないって」

「じゃあ……えーと、これ、このままにしとくの？」

「ああ、カバー掛けといたら、見えないしな」

「触ったりとか、変なことしない？」

「さあな、それは分かんないな。俺だって、したい時に曜子がさせてくれないと、欲求不満になっちゃうからなあ」

「そんなの駄目！」

「何だよ、もしかして自分のに嫉いてるのか？」

「や、嫉いてるって、そんなはずないじゃないの、どうして私がそんなこと——」

慌てた様子で体を引くと、緩んでいたバスタオルがほどけた。引きあげようとした手を掴んでとめる。

「安心しなつて、別にアレだけにムラツとくるんじゃないんだからさ」

バスタオルを奪い、そのまま、体から引き剥がす。

「あつ、もう」

湯で火照った肌の匂いと、ボディシャンプーの芳香が広がり、曜子が反射的に胸の膨らみを両腕で隠した。

「ただ俺は、彼女の、ベッドに座って揃えている太股の間に目を向けて、薄いめの陰毛に飾られた恥丘を見下した。」

「あれつて、あくまで一つのパーツだろ。やっぱりさ、曜子がちゃんとここにいて、こうやって股の奥に隠れてるから、ムラツとくるんだよ」

「こんもりとした膨らみに手を伸ばして、ヘアを指先でかきまわす。」

「じゃあさ、これ見て、変なこと想像したりもしない？」

内腿の間から顔を覗かせている小さな尖りを、包皮越しに弄ると、腰が小さく揺れはじめた。

「ああ、曜子が俺の部屋にきてくれる限りはな。ほら——」

「あんっ！」

ベッドに押し倒して、広げた太股の真ん中に顔を寄せた。

湯にほんのりと染まった秘部は、開き気味になった柔肉の狭間から、かすかな女の匂いを漂わ

せている。

「ちゃんと中まで綺麗にしてきたみたいだな」

「ば、ばか……。そりゃ洗うわよ……」

「本当に綺麗になってるか調べてやるよ」

両手の指を使って大陰唇を開く。曜子の内側が弾けだして、ハの字に広がった繊細な薄襲の向うに、艶々としたピンクの秘肉がさらけ出された。

真っ赤に熟した粘膜に唇を押し当てて、奥を舐めあげる。

「あんっ……！」

薄い潮の味と、とろりと粘ついて歪んだ薄肉の感触が舌に絡まった。

目の前では、周囲の肉に引かれてずり下がった包皮の中から、小豆大に膨れたクリトリスが頭を覗かせている。

その全てを舐めしやぶり、次第に荒く乱れていく息遣いや、時折、ヒクヒクと細かく跳ねる内腿の感触、そして、秘部の奥の火照った膣肉が醸す欲情の香りを楽しむ。

「あうんっ！」

差し入れた舌を、膣口がキュと絞めつけてきた時、曜子の腰を掴んで、体をうつ伏せにした。

「またこんな恰好にするんだから」

尻を持ちあげてやると、振りかえってきた曜子が、欲情に潤んだ瞳を向けてくる。

「二ラウンド目は、この大きなお尻を楽しませてくれよ」

「また……。気にしてるのに」

曜子が再び顔を伏せて、それでも立てた膝を横に滑らせた。

むっちりとした量感の白い膨らみが、ウエストの括れを強調して左右に開く。内腿の奥で、数本の陰毛を貼りつけている柔肉がほころびて、桜色の小陰唇が覗いた。それはもう、充血して膨らみ、愛液の艶を湛えている。

尻房を両手で鷲掴んで広げた。

「あっ、いや……」

恥ずかしさにくねる厚い肉の底に、翳った肌色の小皺が露出して、更にその奥で、肛門が円状に盛りあがる。

淫茎を外側の肉襲に沿わせて滑らせ、合わせ目をめくりあげる。

「あっ、着けて……。あれ着けてね」

「大丈夫だって、さっきあれだけたっぷり出したし、それに——」

内側の、かすかなザラつきを持った薄肉を亀頭でこねまわす。

「ほら、直接の方が感じるだろう」

「あぁっ……。う、うん……。熱いのが分かる……」

切なげな喘ぎと共に尻のうねりが大きくなり、歪んだ薄肉が亀頭に粘りついてきた。

「入れるぞ」

腰を突き出すと、小陰唇が短い愛液の糸を引いてニチャツと広がり、ほぐれきつた膣口が、ほとんど何の抵抗もなく俺を受け入れていく。

淫茎全体を包みこんでくる、暖めたゼリーののような味わいに、たまらず底に向けて押し入れた。

「うぐうつ……。ふ、深いっ！」

重くかすれたうめきを漏らして、曜子が尻をくねらせる。鼠径部に密着しているヒップが押しされて潰れ、たわんだ膣孔が淫茎を圧迫した。

走った快感に思わずうめき、俺は、横長に潰れている尻房を両手で割り広げて、その狭間の奥に向けて腰を打ちこみはじめる。

「あうんっ！ い……イイツ、違う、さつきと感じが違うっ……」

「だろ。俺も、着けない方が中のヒダヒダがよく分かって気持ちいいんだよな」

曲げた指のままに歪む柔軟な尻肉の手触りと、淫茎を出し入れするたびに、クチャクチャと濡れた音を零しながら、愛液にまみれた赤い粘膜を弾ませている膣口。

そのすぐ上で、くすんだ肌色の小皺を精一杯に広げて、奥の肉の輪を盛りあげている肛門の窄まり。

「も、もつと、ああっ！ もつとキテ、もつと激しくっ！」

曜子が、自分から尻を前後に振りはじめた。

ぬめった粘膜と固い肉塊とがこすれ合う淫らな粘着音に、豊満な尻肉がぶつかってくるときの、妙に間の抜けた打音が被さった。

「んっ、んっ、んんっ！ ハア……ハア、い、イイツ！ んっ、んんっ、んんっ！」

まだ一回目の余韻がくすぶっていたのだろう、見下ろす曜子の背中では、背骨が浮き出す程によじれており、豊かなヒップは、膣孔に捉えた男の肉の味わいを貪ってくねっている。

親指を、広がった尻房の狭間の奥に這い進めていく。

「ヒッ！ あっ、嫌、そんなとこ、嫌っ……」

撫であげてやった途端、肛門が窄まって、同時に、膣孔がギュツと巻きついてきた。
「嫌って、本当は嬉しいクセに」

くぼんだ肛門を追って、太い指を内側に浅く押し込む。

奥の肉の輪をマッサージするように愛撫しながら、淫茎を感じるキツすぎる程の締めつけを引き剥がすように、腰の動きを早めていく。

「あうんっ……！ 意地悪なんだからあ……」

喉に絡む嬌声をあげると、曜子もまた、ピップを振り乱して俺に応える。

「ああっ、くっ！ あうんっ……！」

淫茎のつけ根に押されて潰れている柔肉のクッションと、鼠径部で弾む尻肉のむっちりとした量感。

「ハア、ハア、ハアン……ああっ、イイ、凄くイイッ……!」

ベッドを軋ませて体がしなり、下を向いて揺れている乳房がシーツをこする。乱れて広がっている髪が更にもつれていく。

「くっ! くうんっ……!」

まるで子犬の鳴き声のような喘ぎを漏らして、曜子が俺の下腹にヒップを押しつけてこねまわしはじめた。それは、更に深さを求める女の仕草であり、彼女が絶頂を渴望している証拠だった。

「きて、お願いきて、いっぱいきて」

「何だ、もうイキたいのか?」

「うん……うん、イかせて、待てない、もう待てない」

握り締めた尻房を引き寄せて、淫茎を深々と打ちこむ。

「あぐうっ……!」

亀頭に、丸くコリッとした子宮頸部が当り、重く粘るような弾力と共に歪んだ。

しなやかでキツイ筋肉に裏打ちされた膣肉が、更に強く、グイグイと食い締めてくる。

亀頭の先端にこされる丸い異物感と、幾重にも重なった肉のリングのような膣孔の味わい。

うながされるままに、下腹の奥から熱い欲望のたぎりが湧きあがってきた。

俺の変化を体の底で感じ取ったのだろう、曜子が、更に高く尻を掲げ、固く突き立ったクリトリスを肉竿の裏側にこすりつけはじめた。

「あううっ! きて、ああっ! お願い、待てない、もう待てないっ……!」

深く収縮した膣孔がビクビクと小刻みに震えて、子宮頸部が敏感な亀頭の先端にこされる。

淫茎から背骨を抜けて突っ走った快感によって、射精の衝動が押え切れないレベルにまで膨れあがる。

瞬間、俺は、曜子の最深部に向けてトドメの一撃を叩きこんだ。

「ひぐっ……!」

胸の奥から甲高くかすれた叫びを絞り出し、曜子が、絶頂に打ち震えながら肢体を反り返す。

同時に、下腹の奥から亀頭の先端に向けて、太く熱い一本の線が突き通り、射精の快感と開放感が全身に広がっていった。

うつ伏せに横たわったベッドの上で、曜子が、荒い呼吸に背中を波打たせている。その尻房には、掴んでいた手の形が赤く残されており、狭間の奥では、濃いぬめりにまみれた秘部が、まだ時折ヒクッヒクッと震えている。

心地好い疲労感と満足感に浸りながら見下ろしていた俺は、かすかな異臭に気づいた。

精液の匂い。

だけどそれは、曜子の秘部から漂っているのではなくて……。
えっ？

匂いに引かれるように顔を上げた途端、余韻なんてものは消え去ってしまった。

「おい、曜子、曜子ってば！」

尻をパチンと叩く。

「ううん……なに？ もうちょっと休ませてよ……」

目を閉じたまま、物憂げに言った曜子の背中を揺する。

「おい、ちょっと起きて見てみるって、ほら！」

「ええっ……もう、本当にっ。何なのよ？」

促されて、前のヘッドボードに張りついている『あれ』を見た途端、その目が見開かれた。

「ち、ちよつと！ 何よこれ、これってどうしちゃったのよ？」

『あれ』は、今の曜子のモノそのままに愛液で濡れていた。

しかし、その違いは、充血して膨らんだ柔肉の狭間から、明らかに精液と思える白濁した粘液を零していたのだ。

曜子が、慌てた様子で股間に手を寄せて、自分の中に指を突っこむ。

そのまま奥をまさぐって抜き出した指には、さっき俺が出したはずの精液は、もちろん一滴も着いてはいなかった。

【3】

「あつ！ ほらここよ。この変数、文字型で宣言してるのに、ここに数字を代入しようとしてる」

曜子が肩越しにディスプレイを指差した。

表示されているプログラムリストを目で追っていくと、なるほど確かに、その通りだ。

「へえ、なかなかやるもんだ、よく気づいたな」

振り向いて言うのと、自慢そうな笑顔が見返してくる。

「まだ腕は錆びついてないでしょ。でもさ、もう少し分かりやすい変数名つけた方がいいと思うけどな。せめて、変数の型で頭の文字決めとくとかさ」

「うーん、分かってるけど、それ、面倒なんだよなあ」

言い訳しながらキーボードに指を走らせて、リストを修整した後、実行してみる。

別ウィンドウ内で走ったプログラムは問題なく作動した。

「ほら、ちゃんと動いた。じゃあ、約束だったよね」

後ろから伸びてきた手が首筋を撫で下ろして、胸板に触れてくる。

「約束？ 何だったけな？」

「もう、ちゃんと分かっているクセに。今日の分が終わったら、私の相手してくれるって約束だったじゃない」

「ああ、その約束ね。それってこれのことかな」

曜子の腕を掴んで引き寄せ、胸の辺りに顔を埋める。服の下からノーブラの乳房の感触と、さつきシャワーを使った時に着けなおしたんだろう、いつものラベンダー系のコロンが香った。

「だめ、最初はそこじゃなくて、ここ……」

曜子が俺の顔を優しく引き離して、唇を重ねてきた。

*

長くて短い時間が過ぎて、俺たちは汗をかけた体をベッドに横たえていた。

「また今日も二回もしちゃったね」

うつ伏せの上半身を起すと、曜子が、まだわずかに乱れている息遣いの声で言った。

「二回もって、シテって言ったの曜子じゃないかよ」

「ウフフツ……。だつてさあ」

俺の裸の胸に乗っている細い指が、小さな円を描きはじめる。

「何だか最近、前よりもずっとヨクなってきたよ」

実際、そうなんだろう。

ここ連日の激しいセックスを思い返ししながら、ベッドのヘッドボードに目を向ける。

掛けた花柄のカバーの下に隠れている『アレ』を初めて見た日から、今日で一週間が経っていた。

曜子の中に出したはずの精液が、どういう訳か移動してしまうことに、最初は俺たち二人も気味悪さを感じてはいたが、今ではもうすっかり慣れてしまい、気にならなくなっていた。

いや、そればかりか、曜子などは、その便利さの味をしめてしまったようだった。

「知らなかったんだよね、中に出してもらおうのが、あんなに気持ちがいいって」

甘えるように俺の胸を撫でまわしながら、言葉が続ける。

「何だかさ、本当にちゃんとセックスしたんだって、充実感って言うのかな、そんな気持ちになれるの。だから、途中の時もさ、前よりもずっと感じるようになってきちゃって……」

「へえ、じゃあ、出た時の感じは分かるんだ」

「うん、はつきり分かるわ。熱いのがお腹の中に広がって行って、ジーンと体全部が痺れちゃうみたいになって……」

曜子が、もう片方の手を俺の股間に伸ばしてくる。

「ねえ……。思い出したらまたシタくなってきちゃった。いいでしょう?」

「おいおい、いくらなんでも三度目だからな、せめてもう少し休ませてからにくれよ」

「ダメ。そんなこと言って、本当は嬉しいクセに」

「何だよ、それ、どこかで聞いた台詞だな」

「ウフフツ……。すぐに元気にしてあげる」

握った淫茎に顔を寄せて、まだ薄っすらと濡れている唇を開く。

最初は愛液に汚れている亀頭を舐め清めて、次に、先端のくぼみを舌尖でチロチロとくすぐってくる。その間も、手は肉竿の部分と、その下の垂れ袋を優しくさすり続けている。

「随分と慣れてきたな」

「そうかな……」

恥ずかしさを艶めかしい笑みに隠して、股間に顔を伏せる。

深く啜えこんできた唇が窄まり、頬がくぼむ。淫茎の中心を走った鋭角的な快感の後、喉をコクリと鳴らした。

「ほら、まだ中に少し残ってたみたい……」

顔を起して、唇から舌先を覗かせる。唾液と混じり合っている精液の残滓を見た時、再び昂ぶりが湧きあがってきた。

俺と曜子の生活はそんな感じで続いた。

会社が終わるとすぐに部屋にやってきて、ちょうどその頃には、起床後のシャワーも済み、朝(?) 飯も食い終わってプログラミングにかかりだしている俺を手伝う。一段落ついた後は、決まってセックスだ。

ある意味、充実した生活ってやつかも知れない。その証拠に、俺の仕事は曜子の手伝いを割り引いても、以前よりも遥かに進みが早くなり、また、質も向上していた。

だけど、状況がそうなってくると、男つてのはどうしようもない生き物で、何となく窮屈な感じが、俺の心に芽生えはじめていたことも、また確かだった。

【4】

「あのさ、私、そろそろ会社辞めようかと思ってるんだ」

セックスの後のシャワーを済ませてバスルームから戻ってくると、曜子がいつになく真剣な目をして言った。

「辞めるって、急にどうしたんだよ。何かあったのか?」

「うん……。あのさ——」

曜子が俺の手を取って、バスタオルだけを巻いている自分の下腹に触れさせた。

「出来ちゃったみたいなんだ」

「で、出来たあ？」

ここで、「やった！ じゃあ早速、結婚の準備だな」「チツ、まいったなあ、で、いったいどうすんだよ？」「本当に俺の子か？」と、どの台詞を言うかによって、その後の二人の関係は決まってくるもの（らしいの）だが、咄嗟に俺の口から出たのは別の言葉だった。

「どうして出来たりするんだよ？ 変じゃないか」

「どうしてって……。それは、これだけ毎日、着けないでシてるんだし……」

答えた曜子の口調も、どことなく歯切れが悪い。

「いくら生でシテしてもさ、俺のは『あれ』の中に移動してたんだろう……」

改めて口してみると、言ったことに対する現実味が希薄に思えてきて、言葉尻が弱々しくかすれてしまう。

『あれ』って、何のことか。」

俺を真つ直ぐに見つめて、曜子が訊き返してきた。その口ぶりは何かを振り払おうとでもしているようで、言葉の調子も普通に戻りかけている。

『あれ』は、あれじゃないか、ベッドのヘッドボードに引っついてるお前の……。

と、言いかけたが、言葉にする前に口の中から消えてしまう。

「それは……。ちよっときてみろよ」

俺は、曜子の手を引いて、寝室に向かった。

先程の激しいセックスの名残を残して乱れたままのベッドに近づき、ヘッドボードに掛けてある趣味の悪い花柄のカバーをめくりあげる。

ない！

そこには、当然だ、とでも宣言しているかのように何もなく、ただ、ニス塗りの茶色の板があるだけだった。

「ほら、何もないじゃない」

曜子が後ろから手を掴んで、自分に向き直させる。

「もうそんなこと、どうでもいいじゃない。私たちがずっと上手くいくわ。プログラムの仕事だって、二人だったら今以上にこなせると思うし、いえ、もう三人かな」

「だけど、本当にいいのか？ 会社の仕事あんなに頑張ってたじゃないか」

「うん。かまわない、もっと大事なもの見つけたんだから」

曜子は変った。

以前は、負けん気が強くて、時には突っ張り過ぎだとも思えた性格が薄れて、その代わりに、もっと現実と直接繋がる深い部分で強さを増したようだった。

これが『母親』ってやつなのか。
振りかえってベッドを見る。やはり何も異常はなく、ベッドはただのベッドにしかすぎない。
引き寄せた曜子の体を抱き締めながら、だけど俺は、どこかしっくりいかないものを感じて
いた。

一ヶ月後。

「おい、本当に一緒に診察受けないと駄目なのかよお」

俺の情けない口調の声を聞いて、周りで順番を待っている女性たちが失笑した。

周りを見まわしてみても、待合室にいる男は俺一人。やっぱり、産婦人科って所は、男にとつて居心地のいい場所じゃない。

「もう、ほら、笑われちゃったじゃない。いい加減、覚悟決めなさいって」

隣に座っている曜子が、脇腹を突っついてくる。

だけど、彼女自身も押え切れない笑みを浮かべて、近くの知らない妊婦と目配せを交わし合っている。妊婦同士ってのは、ただそれだけで仲間意識が生まれるものらしい。

「分かったよ、もう言わないって」

「そうそう、そうやって大人しくしとくの、もうパパなんだからさ」

俺が心の中で溜め息をついてソファにもたれ掛った時、診察の順番がきたことを告げる看護婦の声が聞こえた。

「じゃあ、その診察台にあがって、服を緩めてもらえますか」

まだ俺とそう歳も変わらない医者が、曜子に言うてから、近くに置いてあったキャスターつきの検査装置を引き寄せた。

慣れた手つきで付属のキーボードを叩くと、スクリーンが明るくなって、軽いマシンノイズが聞こえてきた。

初めて受ける超音波検査は不安なのだろう、曜子は、少し膨らみが目立ち始めている下腹を露出して、医者に落ちつきのない目を向けている。

「心配いりませんよ、痛みはまったくありませんから。このプローブをお腹に当てて——」

安心させるように言いながら、装置からケーブルで繋がった小型の装置を示す。

「——ここから出る超音波のエコーで、子宮の中の赤ちゃんの姿をこの画面に映して診察するだけですからね」

続けて、装置の上に乗っていたチューブを取って、絞り出した透明なジェルを曜子の腹に塗り広げていく。

「じゃあ、はじめますから」

曜子が頷くと、医者がプローブを押し当てる。

スクリーンの上部から、一見しただけでは故障したテレビの映像のようにしか見えない白黒画像が徐々に写し出されていく。

「えっ?」

画像が半分ばかり表示された時、医者表情が曇った。

画像を凝視しながら、プローブを忙しなく動かすはじめる。

「あ、あの、何か変なんですか?」

曜子が脅えた声で訊いた。

「い、いえ、でも、これは……あの、もしかして、装置が故障してるのかも……」

慌てた様子で検査装置のキーボードを叩いている医者を横目に、俺は、座っていた椅子から立ちあがって、スクリーンを見つめる。

そこに写し出されていたものは、見間違えようのない、小さなベッドの姿だった。